

第8回文化・教育委員会議事録

1. **開催日時**：令和元年12月16日（月）16時～18時

2. **開催場所**：晴海トリトンスクエアY棟2階 Y2A

3. **出席者**：

＜文化・教育委員＞（五十音順）

青柳正規委員長、秋元雄史委員、浅葉克己委員、市川海老蔵委員、
今中博之委員、今村久美委員、小山久美委員、織作峰子委員、桂文枝委員、
川越豊彦委員、喜名朝博委員、絹谷幸二委員、コシノジュンコ委員、
真田久委員、SHELLY委員、篠田信子委員、杉野学委員、銭谷眞美委員
宮田慶子委員、吉本光宏委員

＜臨時委員＞

伊吹英明内閣官房オリパラ事務局企画・推進統括官、
川瀬和広外務省大臣官房文化交流・海外広報課課長、
藤江陽子スポーツ庁審議官、坪田知広文化庁参事官（芸術文化担当）
小原昌東京都教育庁教育政策担当部長、武市玲子東京都生活文化局次長

＜組織委員会＞

古宮副事務総長、布村副事務総長、伊藤企画財務局長、
小林広報局長、佐藤アクション&レガシー担当部長（文化担当）、
中安アクション&レガシー担当部長（教育・文化担当）

4. **次第**

【議題】

1. 東京2020 NIPPONフェスティバルについて
 - (1) 東京2020 NIPPONフェスティバルの活動報告
 - (2) 東京2020 NIPPONフェスティバル主催プログラムの検討状況
 - (3) 東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラムの検討状況
2. 東京2020教育プログラム「ようい、ドン！」の進捗報告
3. アクション&レガシーレポート

5：配布資料

【資料】

資料1：文化・教育委員会委員名簿

資料2：東京2020 NIPPONフェスティバルの活動報告

資料3：東京2020 NIPPONフェスティバル主催プログラムの検討状況

資料4：東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラムの検討状況

資料5：東京2020 教育プログラム「ようい、ドン！」の進捗報告

資料6：アクション&レガシーレポート

※資料3，4は机上配布のみとし、会議終了後回収いたします。

○布村副事務総長 失礼いたします。時間になりましたので、ただいまから文化・教育委員会 8 回目を開かせていただきます。

委員の皆様には、年末の忙しい中、お集まりをいただき誠にありがとうございます。また、お久しぶりでございます。開会前の進行を務めさせていただきます、副事務総長の布村と申します。

本日のメディアへの公開についてお知らせをいたします。本日の議事の内容については調整の事項が多々ございますため、会議の冒頭のみをオープンという形になっております。

それでは最初に、開会に当たりまして武藤事務総長から一言御挨拶を申し上げます。

○武藤事務総長 本日は年の瀬も押し迫りまして、大変お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます

昨日は新国立競技場の竣工式が行われました。新国立競技場は数年前に紆余曲折した経緯がありますけれども、立派な競技場ができ上がりまして、私ども組織委員会に、引き渡されることとなります。

組織委員会としては、これにさまざまな仮設オーバーレイの工事を施しまして、来年の本番に向けて準備をしていきたいと思っております。それから、この近くには選手村がありますけれども、12月に完成する予定となっております。

この委員会も発足からはもう早いもので、あっという間に来年、オリンピックの年を迎えることになりました。この間、ラグビーワールドカップが開かれましたけれども、歴史的な活躍もありまして、多くの国民がみんなラグビーファンになって、世界中の注目が日本に集まりました。スポーツには世界と未来を変える力がある、これが組織委員会の大会ビジョンでございます。

本日、御議論いただきます、文化・教育につきましても、世界と未来を変える大きな力があるというふうに考えております。日本の魅力を世界に発信して、子どもたちにかげがえのない経験を提供することを通じて、人々に夢を与え、未来を創造していく、そういう重要な取組だと思っております。

来年3月には福島県から聖火リレーがスタートいたします。文化プログラムにつきましても、聖火リレーとほぼ同時に全国に展開してまいりたいと思っております。

東京 2020 NIPPON フェスティバル、3月下旬からパラリンピックが閉会する9月にかけて、実施をして日本各地の魅力的な文化を国内外に強く発信していきたいと思っております。

フェスティバルを通じて、より多くの人々に、大会に御参加いただくとともに、文化・

芸術を通じた共生社会の実現というレガシーを創出していきたいということでもあります。

教育につきましても、スポーツと平和を題材といたしました、英語のスピーチコンテスト、また大会時には、学校観戦の機会をつくるといったようなことなど、子どもたちにとって、大会がかけがえのない記憶・レガシーとなるように取組を進めてまいります。

委員の皆様には2015年5月から7回にわたって、御議論をいただいております。御支援、御協力に改めて深く御礼を申し上げます。オリンピック開会まで、あと221日ということになりました。大会前にお集まりいただくのはこれが最後と、この文化・教育委員会が最後のチャンスと言うこととなります。これまで本当にあっという間に年月が過ぎてきたというふうに思います。

この機会に、忌憚のない御意見御議論のほどをよろしくお願ひしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○布村副事務総長 武藤事務総長、ありがとうございました。

続きまして、本委員会の委員長でいらっしゃいます、東京大学名誉教授・多摩美術大学理事長・奈良県立橿原考古学研究所所長の青柳正規委員長からお願ひいたします。

○青柳委員長 青柳でございます。

今日は会の次第にございますとおり、東京2020 NIPPON フェスティバル、それから東京2020 教育プログラムの「ようい、ドン！」それからアクション&レガシーレポートをテーマとして、進めてまいりたいと思います。

東京2020 NIPPON フェスティバルに関しましては、前回委員会後に実施しました4月4日の製作記者会見を皮切りに検討を進めてまいりました。そして、2020年春から全国で展開される、フェスティバル本番に向けまして、期待感を醸成させるため、企画概要の公表や、あるいはプレイベントを実施し、また、より多くの方々の参画を促すため、ワークショップの実施や協賛プログラムの公表を行ってまいりました。

本日は、これまでの活動を説明させていただくとともに主催事業、それから共催事業の検討状況をお伝えし、御意見をいただきたいと思います。また、教育プログラムに関しましては、オリンピック・パラリンピック教育実施校、「ようい、ドン！スクール」、これは、森会長の命名ですが、前回の報告時から約900校増加し、全国で1万8,000校を突破するなど、順調に取組が広がっていると伺っております。また、学校で活用いただける指導案等の制作や、東京2020高校生英語スピーチコンテスト、聖火リレー関連プログラム、学校の運動会におけるオリンピック・パラリンピック関係の取組の表彰など、教育及び機

運醸成の観点から、多くの子どもたちが関わることができる取組を工夫しながら集めてまいりました。大会本番期間における子どもたちの観戦や参画に関しても、順調に検討が進められていると伺っております。

本日は進捗の報告を受け、これらの取組を着実に子どもたちの心にレガシーとして残るよう、御意見を頂戴したく存じます。いよいよ大会本番まで、221 日となりましたが、総長のお話にあったとおり、委員の皆様にお集まりいただき、御議論いただく場としては今回は実質的に最後となる予定でございます。

そのため、本日はこれまでの文化・教育の取組を内外に御報告するための、アクション & レガシーレポートについても御議論いただきたいと思います。大会本番及び大会後のレガシーを見据えて、ぜひ忌憚のない御意見をいただきたく、何とぞよろしくお願い致します。

○布村副事務総長 青柳委員長、ありがとうございました。

それでは、ここからの議事の進行は青柳委員長にお願い申し上げます。よろしくお願い致します。

○青柳委員長 それでは、ここからの議事の進行は青柳が行わせていただきます。

議事に入る前に今回、初めて委員会に御出席いただいた方がいらっしゃいますので、御挨拶をいただきたいと思います。

まず、全日本中学校長会会長、川越豊彦委員でございます。

○川越委員 全国中学校長会のほうから参りました、川越と申します。どうぞ、よろしくお願い致します。

○青柳委員長 ありがとうございます。

続きまして、全国連合小学校校長会会長の喜名朝博委員でございます。

○喜名委員 全国連合小学校校長会会長の喜名と申します。どうぞ、よろしくお願い致します。

○青柳委員長 どうもありがとうございました。

そのほかの委員の方々については、これまでの文化・教育委員会にて、御面識あると思いますので配付している資料 1 をもって、かえさせていただきます。また、本日は臨時委員として、政府からは内閣官房、外務省、文化庁、スポーツ庁の方に、東京都からは生活文化局、教育庁の方に、それぞれ出席いただいております。

それでは、ここでプレス関係者が退室いたしますので、しばらくお待ちください。

○青柳委員長 それでは、議題に入りたいと思います。

では、初めの議題でありますところの東京 2020 NIPPON フェスティバル活動報告について、事務局のほうから説明をお願いいたします。

○佐藤部長 文化担当の部長の佐藤と申します。東京 2020 NIPPON フェスティバルの活動報告につきまして、すみませんが、着座にて説明させていただきます。

資料 2 の表紙をおめくりいただき、1 ページ目を御覧ください。東京 2020 NIPPON フェスティバルは文化の祭典として実施する公式事業として、右下に記載のとおり、事業体系といたしましては、組織委員会が自ら実施する主催プログラムと、国、地方自治体等が行う文化事業に組織委員会が共催という形で連携して実施する共催プログラムで構成されております。

次の 2 ページからは、前回、3 月の文化・教育委員会以降の取組のうち、対外的な情報発信を中心に整理をして記載させていただきました。主なものを御紹介いたしますと、4 月 4 日に製作記者会見を開催いたしまして、主催プログラムの企画概要などについて公表いたしました。また、5 月 29 日に、仙台市におきまして、主催プログラムの東北復興プログラムの企画概要と東北の方々の思いを預かる、巨大人形モッコのデザインについての記者発表会を行いました。

次に 3 ページ目を御覧いただきたいのですが、6 月 1 日・2 日に、福島市で開催されました東北絆まつりにおきまして、巨大人形モッコの 10 分の 1 サイズの模型を展示いたしまして、一般公開いたしました。7 月 4 日には、東京 2020 オリンピック・パラリンピック能楽祭を含みます 5 件の共催プログラムについて公表いたしました。

4 ページを御覧ください。8 月 28 日に主催プログラムの共生社会の実現に向けての企画概要につきまして、記者発表会を行いました。また、10 月 6 日には横浜市におきまして、この共生社会の実現に向けてのイベントを神奈川県と共催で実施したところでございます。

説明は以上でございます。

○青柳委員長 ありがとうございます。こちらの議題は御報告のみとさせていただきます、次の議題に移りたいと思います。

次は、東京 2020 NIPPON フェスティバル、主催プログラムの検討状況について、事務局のほうから御説明いただきたいと思います。

○佐藤部長 それでは、引き続き、御説明させていただきます。

(議事非公開)

○青柳委員長 どうもありがとうございました。

それでは、そろそろ時間もきていますので、次に移りたいと思います。

次の議題でございますけれども、東京 2020NIPPONN フェスティバルの共催プログラムの検討状況について、事務局のほうから御説明いただきたいと思います。

○佐藤部長 それでは御説明いたします。

(議事非公開)

○青柳委員長 ほかに何かございますでしょうか。

それでは、次の教育プログラムもありますので、この辺で共催プログラムに関しましては、また最後に何かございましたら、御意見いただきたいと思いますが、次の教育に関する東京 2020 教育プログラム「ようい、ドン！」の進捗報告について、事務局のほうからよろしく願いいたします。

○中安部長 教育を担当しております、中安と申します。よろしく申し上げます。

「ようい、ドン！」についてということで、お手元の資料、教育関係のものを御覧ください。

2 ページでございますけれども、今、我々が認証という形でさせていただいています、「ようい、ドン！スクール」は全国に1万8,219校ということで、小中高で言いますと、全国に学校大体3万5,000ぐらいあるはずですので、その半分ぐらいの学校に興味を持っていただいて、御参画いただいているという状況でございます。

その次の3ページでありますけれども、幼稚園から特別支援学校、さまざまな形で取組をいただいております、例えばさっき話題に出ていましたパブリカで踊りましたというような報告も幾つかいただいているというところでございます。

6 ページでございますけれども、新たな事業で幾つか進めているものを御紹介させていただきます。

一つは今月末の12月22日、日曜日ですが、東京 2020 高校生英語スピーチコンテストということで「平和とスポーツ」をテーマとした5分間のスピーチを募集しておりました。それについてですね、ファイナリストの最終審査会を月末に、JOCが入る新しいビル

借りてやらせていただくというふうに思っております。

それから 10 ページを御覧ください。こちらは聖火リレーへの関係です。聖火リレーは、まさにその全国とオリンピック・パラリンピックが関係してくるわかりやすいイベントでありますので、それがわがまちを通る際に学校等においてもしっかりと応援等がしやすいようにということで、指導案ですとか、授業用スライド、あるいは塗り絵ですとか、メガホンなどの紙でつくれるものをデータ配布しておりまして、応援をして一緒になって盛り上がっていただけたらと思っております。また、レポートを出してくださった学校には、感謝状ということで、そこに顔写真が載っている方はオリパラの聖火リレーのアンバサダーという形で御協力いただいている方々でありますけれども、そうした方々からのメッセージを載せた感謝状をお送りしていきたいと思っております。

それから、その次のページを御覧ください。こちらスポーツフェスティバルということで、今 5 月にやる場合と秋にやる場合とありますけれども、全国で運動会や体育祭でオリンピック・パラリンピックと関係しているいろいろ盛り上がってくれた取組についてです。左のほうはフラフープで五輪書いていますし、右から 2 番目の写真も、みんなで集団体操にて、五輪を描いてくださっています。あと、模擬聖火リレーなど、いろいろやってくださっている取組を御紹介して、ホームページに載せていくという取組をしております。表彰もやっておりました。1 位になったところには金色のバトンに高橋尚子さんからサインいただいたものをプレゼントしたのですが、そうした形で取組を進めさせていただいております。

15 ページを御覧ください。こちらの学校連携観戦チケットということでございます。オリンピック・パラリンピックを通じてですね、今大体、確保している枚数では 130 万枚以上確保しておりまして、希望はこの夏ぐらいまでに各自治体等から募っておりました。要は学校ぐるみで、クラス単位で競技場に来て観戦したいというふうにおっしゃってくださるところに機会を提供するというので、今大体やりたいという希望と枚数のほうで 130 万枚ぐらいなっています。現場レベルでは 1 セッションに多数の子どもが来る想定となっている会場もあり、現実的なプランにするのはかなり調整が必要ですが、できるだけ多くの子どもに来ていただけるように努力をさせていただいております。

それから、16 ページはエスコートキッズプロジェクトということでありまして、ラグビーのワールドカップのときに選手と一緒に入ってきて、その国の国歌を覚えて歌っている子どもたちがいましたけれども、あれに似たような取組でエスコートキッズというのを東京

大会でもやらせていただくというふうに思っております。各競技の IF、国際競技連盟からの実施の有無についての御希望もあり、色々な調整が必要だったのですが、大体、資料に記載しておりますとおり 10 競技程度、人数にして 3,000 人ぐらいの子どもが御参加いただくような形で進めておりまして、ご協力いただくパートナーも含め、近々発表させていただきますというふうに思っております。

それから、17 ページでございます。一緒に体験をするということも一つの方法だと思いますけれども、パブリックビューイングというのがあります。オリンピック・パラリンピック、どうしてもその知的財産の管理というもののルールが厳格なわけですが、今回、IOC や関係パートナーと調整を重ねまして、これはかなり幅広くできるようになっていますけれども、学校はもちろんのこと、この中に記載しておりませんが自治体とか、あと自治会、町会、商店街、競技団体、経済界協議会、国際機関、大使館、児童福祉施設等々でもパブリックビューイングができますという形で御案内をさせていただいているところでございます。それからフラワーレーンプロジェクトというのは、競技場の入り口観客の方々が入場のために待つところにフェンスを立てて、人の流れを制御しますが、これについては、東京都とか、神奈川県の例もありますけれども、各競技場地元自治体の御協力を得てですね、鉄のパイプじゃ味気ないので、朝顔を育てていただいて朝顔の鉢を並べて、レーンのかわりにしようという取組でございます。

それから、19 ページを御覧ください。こちらは教育プログラム特設サイトでございますが、以上のさまざまな取組を進めておりまして、サイトのアクセス数とか教材のダウンロード数なんかもある程度増えておりますので、引き続き頑張っていきたいというふうに思っております。

それから今日は御欠席ですが、委員の先生から、大学の取組についてご質問を受けますので、22 ページ、23 ページで大学の取組を載せております。学園祭に呼んでいただいたら、マスコットを派遣するでありますとか。これは縦割りというわけではないのですが、私ども教育担当は小中高を担当しており、大学を担当しているところは別なのですが、大学生はボランティアに参加できて、逆に中学生と高校生の方からボランティアできないのかとかなりお問合せを受けるのですが、そこは泣く泣くお断りしているという事情もあります。今はボランティア 8 万人で、10 代・20 代の若者には、非常に多くの方々に応募いただき、マッチングを経て、大会時には大会ボランティア全体の約 3 分の 1 の方に活躍いただく見込みでございます。

教育担当は実は5人しかおりませんで、こうした取組を5人でやっているわけではありません。組織委員会全体の思いとして若い世代へのレガシー、次の世代にオリンピック・パラリンピックを体験してもらいたいという気持ちで、色々な取組を集めて御紹介させていただきました。

以上です。

○青柳委員長 どうもありがとうございます。

ここから教育関係の委員の方々にいろいろ御意見をいただきたいと思いますが、最初のころに比べるとかなり、かなり分厚いプログラムができ始めているのではないかと思います、どうぞ何でも御意見をお願いいたします。

はい、どうぞ

○杉野委員 今御説明ありました2ページのところの拡大数って、相当広がったんだって始めのほうからね、ちょっと委員で出させていただいて、最初はどうなるのかなって思ったのですが、ものすごい広がり具合だなというふうに思います。

それで、私はずっと障がいの関係で、例えば、御説明ございましたところの17ページのところでね、フラワーレーンのプロジェクトに、臨海地区のほうの特別支援学校の生徒さんたちも関わっておりますし、それに限らず共生社会ってことで考えれば、子ども全体がいろんな意味で関わっているんじゃないかなと。どんどん広がってきているなというのが実直な感想でございます。ますます広がってもらえばいいかなと思っているんですね。

私は、実は東京オリンピックのときにも私事で恐縮なのですが、小学校の3年生ぐらいだったんですけどね、九州の田舎のほうでね、白黒TVを見ていて、まだ覚えていますよ、はっきりと。

ですから、子どものときのそういう関わりというのは何らかのものがあれば、恐らく、大人になっても思い出すし、日本そのスポーツの広がり、スポーツを通して豊かな気持ちを育んだとか、頑張っているなあというような、何らかの子どもなりの、感想というのも恐らく大人になっても抱けるんじゃないかなと思っていますので、ぜひお願いしたいと思います

○青柳委員長 ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○銭谷委員 今の杉野先生のお話と重なるかもしれないですけども、私は、「ようい、ドン！スクール」が1万8,000校まで拡大したというのは、本当に大変素晴らしいことだと

思って今、お聞きをしておりました。

特にさっき、共催プログラムのところで実は感じたのですが、47 県の共催プログラムって、これは東京オリンピックだからしょうがないのかもしれませんが、ほとんどが東京ないしは関東、東北エリアの事業で、関西、あるいは中国、四国、九州というのが非常に少なかったんでどうも、ちょっと東に偏っているのかなと。普通、国のいろんな事業をやると実は、西高東低で西のほうがどんどん参加してくれるという例が多いですけども今回はちょっと、共催プログラムは逆だなあって印象ちょっと思っていたんですけども、それに対して、「ようい、ドン！スクール」が 47 都道府県全てにわたっていますし、数は若干、西の方が少ないって印象はありますけれども、とにかくこれだけの学校が参加してくれたっていうのは大変、皆様方の御努力があったのかなというのがまず一つの印象でございます。

それに加えて、今、杉野先生がお話ございましたように私は前の東京オリンピックのときは、実は中学生だったのですが、でもやっぱり、テレビで見たのはものすごく印象に残っているんです。

それともう一つは、聖火リレーが私らの田舎の県でももちろん、秋田でもありましてですね、中学生が随分参加したんですね。あれは確か、運動部の大変すぐれた、運動選手がどんどん聖火ランナーになったというのを記憶してしまっていて、それはもう、我々の学校でも何人か走ったんですけど、本当にみんなで喜んで応援したというのを覚えてますんで、こういう、「ようい、ドン！スクール」の子どもたちが例えば聖火リレーとか、あるいは観戦チケットを活用して、実際に競技を見るとか、あるいはエスコートキッズになるとか、あるいは、そのフラワーレーンに自分のまちが参加するとかですね、何かやっぱり参加というのはすごくいいと思いますので、できるだけその機会をこれからもつくっていただければ非常にいいんじゃないかなという感じがしました。

やっぱり子どもときのオリンピックの経験というのは、本当に残るって実感していますので、ぜひ、「ようい、ドン！スクール」の子どもたちがこういう、実際にいろんな形で、オリンピックに参加できるような道を開いていただけるようにしていただければいいんじゃないかなと思いました。

○青柳委員長 ありがとうございます。

ほかに。どうぞ

○喜名委員 小学校の立場からお話しさせていただきたいと思ひまして、東京都の場合

2,422校が、「よい、ドン！スクール」になっていますが、東京都の公立学校全てがオリンピック・パラリンピック教育推進校ということで指定されて、少しの予算をいただいて、いろんな取組をしているところであります。オリンピック、パラリンピアンに来ていただいて実際に体験をしたり、お話を聞いたり、それから私のほう学校、江東区にございますので、江東区はたくさんオリンピック会場ができますので、その施設見学ツアーなんか、小学校5年生がやっています。また、区としても国旗、国歌の専門の先生に来ていただいてこれを機会に、国際理解教育という視点でもやっているところであります。また、東京都は観戦の用意をしてくださっているところなんですけれども、17ページでしょうか、そこにあるように、ぜひ、学校の中で、みんなでパブリックビューイングをして、体育館にも今、冷房が入り出しましたので、快適な環境の中でそんなことができるというふうになっているところでもあります。また、ミライトワとソメイティのキャラクターを選ぶときも小学生が参加したということで、とっても盛り上がったということもありました。また、先ほど来にある、パブリカも低学年は全員踊れますし、小学生はほぼ踊れるんじゃないかなというふうに思います。これがただ、オリンピックの応援に使っている趣旨なんだってこと知らない子も結構いたりして、いろんなところでこういう形で参加できるということも必要だなと思っております。

ありがとうございます

○川越委員 小学校のほうで発言があったので中学校のほうからもちょっと、発言を許していただければと思います。

子どものころのオリンピックの思い出ということですが、私は東京オリンピックの時は、5歳でした。秋田の片田舎で白黒TVを観て、いまだに重量上げのヘビー級でソ連のジャボチンスキーというすごい選手がいたっていうのをなぜか記憶に残っています。

そういった、本当に田舎にいても、そういった記憶に残るものですから、東京にいる中学生を預かっていますので、実際に観戦の機会があれば観戦のほうに連れて行きたいというふうに思っているところです。

ニュース等で辞退している学校もあるというふうに聞いているのですが、本校では、全員連れて行きます。ただ、その際にいかにして、安全に子どもたちを連れてって、観戦させて観戦して、そして、また安全に帰ってくるかというところは本校に限らず、今現場はとても頭を悩ませているところです。

あとは、先ほど運動会という話があったんですけども、これもうちの学校の例ですけれ

ども、荒川区は下町ですのでお年寄りが多い地域です。運動会で新しいオリンピック音頭を子どもたちが全員踊ると。盆踊りのプロのようなおじいちゃん、おばあちゃんいますので、その人たちから教わって、運動会当日は子どもと、それから地域のお年寄りと保護者と、グラウンドにみんな出て一緒に踊るといようなこともやってみました。

あとこの「ようい、ドン！」からちょっと外れますが、小学校と同じように、オリンピック・パラリンピック教育を進めているところです。そして、オリンピックはスポーツだけではなくて、文化を発信するということを考えると、本当に日本の伝統文化について学ぶいい機会かなと思います。

日本の子どもたち、中学生が日本の伝統文化についてよく知らないのと、それこそ能とか落語とか、あと、歌舞伎もそうですけども、そういった素晴らしい伝統文化があるのに、日本の子どもたちは知らない。外国の人たちのほうがよく知っている。そうなったときに、日本の子どもたちがちゃんと日本の伝統文化を発信できるように、そういった日本にあるいいものを改めて学ぶ機会になればいいのかなというふうに思っているところです。

様々な事業がありましたけども、ぜひ、今から無理でしょうが、子どもたちが体験できるワークショップのようなものがあれば、子どもたちが実際体験をして、そのよさに気づくんじゃないかなと思います。

それと、日本の伝統文化について子どもたちが、このオリンピックという機会を通して学び直して、それを再認識するというのは、それこそ、オリンピックのレガシーになるのではないかなと、そんなこと思っているところでございます。

以上です。

○青柳委員長 どうもありがとうございます。

はい、どうぞ。

○吉本委員 随分前のこの会議でも発言をさせていただきましたけど、せっかく文化もやっているんで、文化と教育プログラムをなんかの方法で連携できたらいいんじゃないかなというふうに思います。特に文化プログラムには、子どもたちが参加できるものがたくさんありますので、それを、この、「ようい、ドン！」の枠組みの中に入るのかどうかかわからないですけど、これだけ全国の学校の先生方が子どもたちにオリンピック・パラリンピック教育を推進しているということで、実はオリンピック・パラリンピックでは文化をやっているんだよということをあわせて、広報していただいて、全国各地で行われるものの中には子どもが参加できるものもたくさんありますし、特に東北のモッコのパレードなん

かは、きっと子どもたちも喜ぶと思いますし、あるいは初端の歌舞伎とオペラの、これは土曜日なので、この日に配信しても子どもたちは見られないと思いますが、ぜひぜひ、さつき伝統芸能を学ぶというような意味でも子どもたちが歌舞伎とオペラが出会って、海老蔵さんが出てくださる、すばらしい舞台をぜひ、全国の子たちが見ていただけるような機会があればいいなと思います。

ぜひ、この文化と教育の融合というものをまだまだ、これからありますので、御検討いただきたいなというふうに思います。

○青柳委員長 ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○今村委員 私も、ポジティブなことを今日の場は発言したほうがいいんだろうなと思いつつも、ちょっとどうしても自分が関わっている分野の取組なので、正直な感想を言わせていただきたいです。私は、今日の報告を聞いても、多くの子どもたちがオリンピック・パラリンピックに関われるようにする教育の取組について、令和の時代の裾野の広げ方として妥当だったのか、うまくいったとは正直感じられませんでした。

というのは、すごく学校という枠組みに上手に乗っかかっている子たちの中でも、そこを通じた告知に手を挙げられるというようなことも、もちろん学年集会で何かをやるとかというところで接点を取れた人もいるかもしれないけど、でも実際に、全国の小中学生の15万人ほどが不登校になっていて、不登校傾向の子は中学生だけで45万人ぐらいいるって言われている中で、さまざまな性差の配慮だけじゃなく、障害の特性の配慮だけじゃなくて、子どもたちがその場にいるということを本当に学校という選択肢だけが正しい教育の機会をつくっていると言えるのかということがすごく今、いろいろな教育現場では話題になっています。学校を介してだけがオリンピックとの接点みたいな、この伝え方というのが子どもたちとの唯一の接点になってしまうのはやっぱりちょっと残念だなとこの段階になって、毎回このようなことばかりを言っていてあれなんですけど感じました。

だからこそ、教育プログラムのところでは、もしかしたら届かなかった子たちが実はたくさんいるかもしれないということをきちんととらえることも大切なことなのかなと思っています。そうなったときに子どもたちが自分の意思で学校の先生に言われたことに参加することがここの接点ではなくて、自分の意志で参加したいなって思えたときに参加できるシームレスの参加の機会を、例えばインスタに投稿して参加するという程度のものでもいいと思うのですが、そういう機会を文化のところできちんと確保してかなきゃいけないと

いうことを改めて感じたというのが正直な感想です。

○青柳委員長 ありがとうございます。

何か。

○中安部長 ありがとうございます。叱咤と激励と両方いただきまして、誠に痛み入ります。

まず、その厳しいところでいただいたところですね、今村先生のおっしゃっていた、不登校の方々などいわゆる学校の枠組みの中でとらえきれてない子どもたちをどうするのかというのは、なかなか私ども明快な答えを持ち合わせておりません、申し訳ございません。ただ、私どもなりに努力した一つの試みとして御紹介だけさせていただきますと、マスコットを、小学校段階の方々が決めるという取組をやらせていただきました。あのときは、フリースクールのネットワークの御協力も得て、フリースクールですとか、あるいは各教育委員会の御協力があったからですけども、いわゆるちょっと古い言葉づかいで恐縮ですけど、教育支援センターなどにも声をかけて、外国人学校からも投票していただけるようにいたしました。そういったところからも貴重な1票をいただくような形で、そのときの心構えとしては日本国内にいる小学校段階全ての子どもが、国外にいる全ての日本人の子どもは投票できるようにしようということでやらせていただきました。拙い部分や一つ一つは十分至らないところもあるかと思うんですけども、そうした取組を進めていきたいと思っております。

あとすみませんが、御紹介をもらってしまったので、一つだけ追加で御紹介させていただきます。21 ページですけども、これは IPC のほうで、色々と御検討され今回の日本で行われる、東京で行われるパラリンピックからそういう形になったというものでございますけども、パラリンピック教育を実施した学校を表彰するというものです。パラリンピックの閉会式で表彰して、そこの学校の方々にその場に御参加いただくという事業です。

銭谷委員からのご意見だと思うんですけど、参画が大事というふうにおっしゃっていただきました。私ども、一つでも参画の機会をとって、いろいろと積み重ねてきたつもりでございますが、引き続きできることをしっかりやっていきたいというふうに思っております。

○青柳委員長 今、今村委員がおっしゃった、その教育システムに乗ってない子どもたちを文化でカバーする。それで、文化のほうを、教育システムの中に活用していただいて、その伝統芸能や古典芸能を早くから学校の中で知ってもらって、将来のファンにしてもら

う。そういう相互的な乗り入れが必要ですね。どうもありがとうございました。

ほかに何か。はい、どうぞ。

○真田委員 どうも、ただいまの答えなのかどうかわからないですけども、学校でもいろんな連携への取組の例がありまして、例えばやっぱり1番のものは、地域との連携を図って、教育プログラムをやっているという例があります。

各自治体では今、ホストタウンといいまして、いろんな各国と交流をしている、東京2020大会に来る、206カ国の国の中から、その中から1カ国を選んで、その国と交流をする選手を呼ぶ、それでお互いの文化も紹介しあう。その中にその自治体の中の学校が入り込んで行って、地域の人たちと一緒にお祭りをやるとかですね、歓迎レセプションを行うようなものも行われており、これは非常にいい成功事例として、私も実は注目しているところでもあります。

そういう地域も重ね合わせて、この教育、あるいは文化も考えていくということは、ある意味重要なのかなというのは感じております。

このホストタウンを私も最近興味持って調べてみましたら、今日は内閣官房の方がいらしていますが、464地域の自治体が関わっているということで、これはオリンピック史上いまだかつてないことですね。400を超える自治体が、市町村が一つの国を要するにおもてなしをする。事前キャンプで呼んだり、あるいは文化の交流をしたりですね、そこに子どもたちも加えるという。来年にはますます、交流事業が盛んになっていきますのでこれは恐らく、今回の日本の、これもオリンピックムーブメントして考えますと、オリンピック史上に残すべき、非常に大きな実績だろうというように感じております。

そういう地域と一緒に文化や教育の取組、これが実はホストタウンの中の事業の中で行われている例がたくさんありまして、しかもこれは北海道から沖縄の島しょ部まで全部わたって行われているわけですね。ただ、鹿児島県の三島村、これは500人の人口の島ですけども、ギニア共和国とジャンベというドラムのようなものを使ってお互いにそれを演奏しながら交流をする。外から島に船が着くときに、このジャンベをみんなで鳴らして向かいるとか、そういうような、まさにこれは文化の交流であります。

こういうものが津々浦々行われているというのが、今のホストタウンの中身でして、これはもっと重要視していったいいのかなと、オリンピック史上でも非常に大事な取組になるだろうというふうに感じております。

○青柳委員長

ありがとうございます。それでは、そろそろ時間になりましたので最後のアクション&レガシーレポートについても御検討いただければいけないので、まず事務局のほうから御説明よろしくお願いたします。

○佐藤部長　それでアクション&レガシーレポートについて御説明させていただきます。表紙をおめくりいただきまして、1 ページ目を御覧ください。

本レポートの全体概要といたしましては、第1章から第8章まで、それぞれの分野に分けて構成されておりまして、アクション&レガシープランで定めたレガシーコンセプトに基づいて作成しております。

今後、大会での実績、成果などを付記した上で、全体文案を作成していくという予定でございます。

1 ページ飛びまして、3 ページ目を御覧ください。具体的なイメージとしましては、例えば、第4章の文化のパートにつきましては、四つのレガシーコンセプトに対しての、それぞれのアクション、実績・成果、レガシーを掲載させていただく予定でございます。特に、文化の取組におきましては、全国各地で東京 2020 大会の成功に向けた、機運を醸成していくことができるよう、引き続き取り組んでいきたいと考えております。

続きまして、4 ページを御覧ください。こちら教育のパートにつきましても三つのレガシーコンセプトを掲げまして、組織委員会はもちろんのこと、東京都教育委員会をはじめとしたさまざまな関係団体によるアクションが展開されております。

「よい、ドン！スクールの認証」や各種プログラムの実施を通して、全国でのオリンピック・パラリンピック教育の実施基盤の構築、それと児童生徒における心のレガシーを創出することを目指しまして、引き続き本番に向けて取り組んでまいります。

5 ページを御覧ください。こちらは先ほど、御議論をいただいた東京 2020NIPPON フェスティバルのパートでございます。こちらでは、組織委員会が実施する四つの主催プログラムと国、地方自治体等と連携して実施する教材プログラムについて記載する予定でございますが、本日の資料では、主催プログラムを例として、添付をさせていただいております。

四つの主催プログラムの検討状況につきましては、先ほど御説明したとおりでございますが、東京、日本へ、世界からの注目が集まるこの時期をとらえましてですね、日本が誇る文化を国内外に強く発信できるよう、引き続き取り組んでまいります。

このアクション&レガシーレポートの全体文案ですけれども、大会終了後の来年 2020

年の10月以降、委員長、そして、委員の皆様にご確認いただきたいと考えておりました、その上で2020年の年前に公表するという事を予定しております。

引き続き、御協力を賜ることになりますこととなりますけれども、何とぞよろしくお願い申し上げます。

説明は以上です。

○青柳委員長 どうもありがとうございました。

以上で、本日の議題は3件とも終わりましたが、最後に全体を通じて何か御意見があればいただきたいと思っておりますので何なりと。

はい、どうぞ

○コシノジュンコ委員 今日は浅葉さんが久々にいらして、例えば2020ってオリンピック等とか、オリンピック・パラリンピックと全部言わなくても、2020というだけで世界に伝わるわけですがけれども、目で2020という字をね、文字を浅葉さんなんかちょっと。2020って言えばもうオリンピックに決まっているというような、それぐらいインパクトのあるメッセージというのをせっかくいらっしゃるのに何か、どうかなって思います。ただ、私たちがここにいるというだけではなくて。ちょっと残念だなと思いますね。まだ、今からで間に合うものなら、そういったものだと思います。やっぱり文化、芸術、アート性が見えないと思いますね。

ですから、イベントばかりでアートというか、街にもっとアート性のある芸術性のある、その見え方というのがちょっと足りないのではないかと、っていうふうに思いますけど。美術館の方や、皆さんいらっしゃるので、もう少しその辺も、まだできることならばやっていったらどうかと思います。

○青柳委員長 確かに。まだ、もちろん、固めてはいきますけれども、まだ新しいアイデアもまだまだ実現できることはしていきたいと思っておりますけれども、ほかに何かございませうでしょうか。

○真田委員 閉会式のことでもよろしいでしょうか。

実は私、「いだてん」のほうに関わっております、昨日最終回を迎えました。最後まで視聴率は上がりませんでした、そこで、64年のときの開会式、この最終聖火ランナーが広島で1945年8月6日に生まれた青年が点火したということなんですね。それは平和の世界へのメッセージになりましたけれども、今回、2020年の閉会式、8月の9日ですね。長崎の日であります。64年の東京が開会式で広島からの平和のメッセージで始まって、2020

年の閉会式、長崎、これは64年と2020年をつなげるという意味でも平和の強いメッセージというものを発信するべきではないか、こんなふうに思います。閉会式ですから、8月9日を、原爆を使用した最後の日にしようというような、そのようなメッセージを込められるのではないかとこのように感じまして、ちょっとそれを表明させていただきたいと思えます。

○青柳委員長 ありがとうございます。

事務局のほう、御検討よろしくお願ひします。

ほかに何かございますでしょうか。

それでは、大体御意見をいただいたと思ひますので、本日の委員会はこの辺で終わりにしたいと思ひますので、事務局のほうにお返しいたします。

○佐藤部長 いろいろと御意見いただきましてありがとうございます。先ほど申し上げましたけれども、しっかり制作チームと共有して、よりよいものにしていきたいと思ひます。

それと、先ほど申し上げましたが、お手元のファイルにとじている資料でございますけれども、こちらにつきましてははですね、調整中の内容が多々入ってございますので、申し訳ございませんが回収させていただきますので、机の上に置いといていただければと存じます。

なお、本日の議事につきましては、後日、組織委員会のホームページで概要を公表する予定でございます。御了承いただきますよう、よろしくお願ひいたします。

それと、こちらの文化の関係でございますけれども、東京2020 NIPPONN フェスティバルの全体ラインナップにつきましては、今日の御意見を踏まえて、製作チーム、ディレクターを中心として、相談させていただいて検討を進めますけれども、そのラインナップの発表ですが、一応の事務局の目途としては3月ぐらいに全体、文化のプログラムのラインナップを発表したいと考えているところでございます。

それと、本日のプレスのブリーフィングですけれども、全て事務局で対応させていただきますので、よろしくお願ひいたします。

事務局からは以上でございます。

○青柳委員長 ありがとうございます。

それでは、最後に布村副事務総長より、一言御挨拶をお願い申し上げたいと思ひます。

○布村副事務総長 本日は、文化・教育委員の皆様方には本当に今回も闊達な御意見を多

数賜りまして、本当にありがとうございます。

文化の面では、東京 2020NIPPONN フェスティバルにつきましては、主催の 4 事業の横の連携をはじめ、女性の方々の参画といったことにつきましては、四つの事業のクリエイティブの皆様方に、しっかりお伝えをし、できるだけの実現につなげていければと思います。また、共催事業をはじめ、そのパブリカのようなみんなで歌える、踊れる象徴的なものをつくり上げというのは、なかなか意図的にはできないのかもしれませんが、共催事業をさらに広げていく面とか共催事業一応、今回締め切りにはなっておりますけれども、参画プログラムは引き続き展開していける、応援できるシステムもございますのでそういうところを活用していきたいと思います。

「ようい、ドン！」をはじめとした教育プログラムにつきましても、宿題としては、その文化と教育のさらなる相互乗り入れとか連携のお話もいただきましたし、障害を持ったお子さんたち、あるいは学校に通えてないお子さんたちの参画の広がりとか、そういったところも課題として引き続きあるといったところは認識をし、今後の聖火リレーですとか学校観戦チケットを活用した子どもたちにまず、オリンピック・パラリンピックを見てもらおうと、感動をできるだけ分かち合ってもらおうと、そういう機会をぜひ、一生懸命参画を広げていきたいというふうに思っているところでございます。

そういう文化的プログラム、教育活動については、委員の先生方のこれまでの 8 回にわたります、この親委員会それのみならず、文化の御担当の方々でお集まり、教育の形でのお集まりという形、本当に非常に多い形で御提案をいただいて、ようやくかなり実践もできてきてはおりますけれども、これからいよいよ最終版を迎えていきますので、引き続き皆様方のいただいた御意見をしっかり踏まえて、文化的な活動、教育活動が広がっていくように取り組んでいきたいと思います。

それから、最後に見ていただきましたとおり、もう終わりの準備も始めなければいけないので、できたところはアクション&レガシープランとして、どういう成果があったのか、あるいはさらなる次の大会後に何を残せるのか、何をつなぐことができるのかといったところにもしっかり意識しながら教育・文化活動にもしっかり力を入れて取り組みたいというふうに思っています。

改めまして、この専門委員会は、ほかの 5 本の専門委員会ともども今回、文化・教育委員会最後の機会にさせていただきたいと思います。本当に、2015 年ですから 5 年間にわたります、委員の先生方には幅広い分野からの御提言、本当に多くいただきました。十分

お答えできていないところもあろうかと思いますが、オリンピック・パラリンピックもいよいよ、来年本番の年になりますので、一緒になって文化的なプログラム、教育プログラムもしっかり盛り上がって多くの人たちの方々に、オリンピック・パラリンピックが持っている価値とかメッセージが届くように引き続き努力をしていきたいと思っておりますので、皆様方には御礼を兼ねまして、厚く御礼を申し上げます、引き続き我々も頑張りますということをお伝えさせていただきます。

本当にありがとうございました。

○青柳委員長 第8回、文化・教育委員会はこれで終了させていただく。ということは、文化・教育委員会を、これで最後にさせていただきたいのですが、私といたしましては、これだけ多くの委員の先生方が毎回かなりの出席率で御参加いただきまして、素晴らしい御意見、痛い御意見、さまざまございましたけれども、いただきました。それぞれの先生方が各界で大変御活躍の忙しい中、オリンピックのために、文化プログラムのために、御参集いただいたことを心から感謝申し上げます。

そして、私といたしましては、これがこの文化・教育委員会をともにやってきたということが2020年オリンピックの一つの大きなレガシーになるのではないかと思います。